人口減 高校廃校の危機救え

女子野球部だ！

北海道・栗山高に同好会　3人でスタート　町あげて支援

列島NOW

我がまち唯一の高校を存続させたい。そんな切実な願いから、女子硬式野球に期待を寄せる町がある。

札幌市から東へ車で1時間ほどの場所にある北海道栗山町。町内唯一の高校である道立の栗山高で今春、監督1人と選手2人の同好会が誕生した。

3人が散らばると、グラウンドがさらに広く見える。1年生の辻奈成さんと森乃々花さんは言う。

「町の人がやさしくて、第二の故郷みたい」

町は専門学校の寮を1200万円かけて改修し、高校の女子生徒にも使えるようにした。寮生活を送る2人に町民は弁当を差し入れたり、球拾いを手伝ったり。後援会も発足し、130社がサポーターに名を連ねる。

町をあげて歓迎する背景には、強い危機感がある。炭鉱は1970年に閉山し、企業は移転。人口はピーク時の60年前より半減して1万1千人に。29年創立の栗山高も30年前は1学年240人いたのが、今年度の入学者は25人にまで減った。いくつも支援策を設けてきたが、生徒数の減少に歯止めがかからない。栗山高の存続について話し合う町民らの委員会も「高校が廃校になれば、地域の存続も危ぶまれる」。

侍J栗山監督提案

そんな中で浮上したのが女子野球だった。きっかけは、3年前の車の中だった。

町内で薬局を経営する塩見望さん(63)が廃校の小学校前を通った時、不安を口にした。

「栗山高も危ないです」

すると、こんな返事が。

「女子野球部を作ってみたら。いま人気なんだよ」

「秘策」をくれたのは、野球日本代表・侍ジャパンの栗山英樹監督。当時はプロ野球・日本ハムの監督だった。同じ「栗山」つながりで、実は25年ほど前から親交があり、栗山監督は町内に球場を完成させ、少年野球教室や大会が開かれた。

女子野球は初耳の塩見さんだったが、この話に飛びついた。町や岩手経済人らを巻きこんで動き出す。

先に公立高校で女子硬式野球部を創部していた広島県立佐伯、高知県立室戸、県立島根中央の3地域を訪問。生徒が全国から集まって統廃合の危機を脱した高校があった。

「来年9人集める」

町教委は地域で野球をやっている女子中学生の選手数を調査し、競技人口が増えていることを把握。北海道内には私立の二つの高校に女子野球部があったが、「道内の公立高校で初」とチャンスがあると考えた。

町は監督に日本代表元主将・金田起子さん(44)を起用。激励会に駆けつけた栗山監督も「これから2人が歴史を作り、町に元気を与えてくれるはず」とエールを送る。

同好会は4月、3人ながら活動の1歩目を踏み出した。選手を9人以上集めて「来年は単独チームに」と町民は願っている。（張替穎）

裾野広がり甲子園で決勝　人数集め苦労も

高校女子硬式野球の裾野は少しずつ広がっている。

第1回の全国大会（後の選手権大会）が開かれたのは1997年。参加は5校だった。今年4月時点では全国高校女子硬式野球連盟の加盟校は51校まで増えた。昨夏は決勝が兵庫県西宮市の阪神甲子園球場で開かれ、話題を集めた。

創部すれば成功するかと言えば簡単ではない。

公立校の中で先頭を切って創部した高知県立室戸高は一時、部員が約30人にまで増え、全国で8強入りした。

創部を提案し、初代監督も務めた亀井司郎さん(67)は「高校があるからこそ、全国への扉が開かれ、人材が集まり、話題が発信される」と話す。

ただ、昨年は部員が9人に満たず、単独チームを組めなかった。ここ最近は人数集めに苦労したという。始動10年目の今春は、3年ぶりに単独チームに戻った。人口減少と高校存続に危機感を覚える中、地元スーパーとコラボした弁当を商品化するなど盛り上げに模索が続いている。

山高校女子野球同好会　激励

栗山高女子野球同好会の激励会に、野球日本代表・侍ジャパンの栗山英樹監督（左）も駆けつけた＝5月2日、町提供

練習の準備をする栗山高女子野球同好会の選手ら＝北海道栗山町